道高校新人陸上 女子走り幅跳び

冬野頂点に

〈札幌大谷1年―士幌中央中出〉

女子百㍍ 福島（帯南商1年）は2位

陸上競技の第20回北海道高校新人大会（道陸上競技協会など主催）第1日は29日、帯広の森陸上競技場で行われた。女子走り幅跳びで冬野朝美（札幌大谷1年―士幌中央中出）が5㍍45をマークし、上級生を退け頂点に立った。女子百㍍は、11秒台スプリンターの福島千里（帯南商1年）、熊坂都（札幌大谷2年）の直接対決に注目が集まったが、福島は12秒26で、熊坂に0秒07及ばず2位に終わった。女子ハンマー投げは内野奈緒美（帯農1年）が24㍍21で2位、男子走り幅跳びは佐藤悠平（本別1年）が6㍍83で3位、男子ハンマー投げは青田裕次（帯農1年）が40㍍06で3位に入賞した。第2日の30日は、午前の男子砲丸投げで本間勝人（帯農1年）が決勝進出を果たすなど、十勝勢が続々と予選を突破した。（丸山一樹、中山彩）

【女子走り幅跳び決勝】5㍍51の自己記録に迫る5㍍45で優勝を決めた冬野朝美（札幌大谷1年―士幌中央中出）

【女子百㍍決勝】激しい競り合いを演じ、ゴールへ飛び込む福島千里（帯南商、左）と熊坂都（札幌大谷）

0秒07差及ばず にじむ悔しさ

○…大会第1日の目玉となった女子百㍍決勝。福島千里（帯南商1年）、熊坂都（札幌大谷2年）の11秒台スプリンターがしのぎを削る全国的に見てもハイレベルなレースだったが、福島は0秒07差で熊坂に及ばず。悔しさがにじみ出た。

直接対決は今回で4度目。ここまでは2勝1敗で福島のリードだ。

気温17度、向かい風1・6㍍の悪条件。福島がスタートでやや前に出たが、中盤で熊坂にとらえられ60㍍すぎで40㌢ほどの差を付けられると、結局、詰めきれなかった。

福島は重心の下にきっちり足を置き、地面をうまくとらえる走りが特徴。辻吉則監督は「熊坂選手のように、地面を強くけるタイプの方が向かい風に強い。うちの福島は体も軽いので厳しかった」と苦笑いを浮かべる。

また、決勝は福島、熊坂が隣同士で走り、熊坂にとっては前回勝利したときと同じ状況となり勢いに乗った。精神面の微妙な変化も勝敗に影響した。

「（負けたのは）しょうがないです」と言葉少なな福島だが、二百㍍でリベンジを狙う。

強さ身に付け 4回目に逆転

○…女子走り幅跳びは、十勝出身の冬野朝美（札幌大谷1年―士幌中央中出）が5㍍45で優勝。中学時代には全国大会出場の経験はなく伏兵的な存在だったが、4回目に逆転で優勝を勝ち取るなど昨年までにはなかった強さが備わっていた。

9月上旬の国体予選では少年B（中学3年・高校1年の部）走り幅跳びを制覇し、北海道代表を決めている。しかしこの日は「空中動作がしっくりこなかった」と、納得できない様子。

今季を振り返っても「手応えを確実に感じるジャンプがない」と、向上する記録とは対照的に、完成度はまだ不十分と感じている様子。それだけに、これからさらに飛躍することが期待される。

「国体では少しでも自己記録を更新できるよう頑張りたい」と、10月末に照準を絞る。

【男子ハンマー投げ決勝】1位に34㌢差で3位に入った青田裕次（帯農）

安定感なく 納得いかない

○…男子ハンマー投げの青田裕次（帯農1年）は、1年生ながら3位に食い込んだが、優勝を34㌢差で逃し「悔しい。優勝したかった」と、渋い表情を浮かべた。

幕別中時代に混成競技に取り組むなど、万能型の選手。高校からハンマー投げに挑戦している。記録の水準はまだまだ低いが、持ち前の運動能力で徐々に実績を積み重ねている。

「きょうは安定感がなく、納得がいかない」と、2投目以降すべてファウルしたことを悔いるが「もう1度、基礎から練習し記録を伸ばしたい」と意欲を見せる。目標は同校の先輩・長濱聡志（現・日大1年）が持つ57㍍38の十勝高校記録だ。

【男子四百㍍決勝】準決勝で快走を見せた西貴裕（白樺学園）だったが、後半、力尽き7位に終わる

過酷な日程に 後半力尽く

○…男子四百㍍に挑んだ西貴裕（白樺学園1年）は、準決勝を50秒23のトップで通過したが、決勝は後半力尽き7位に終わった。

49秒台突入も期待されたが、予選、準決勝、決勝と、1日3本の過酷な日程に対応できなかった。決勝は、前半200㍍をハイペースで飛ばして、本来の思い切りの良さは発揮したが、250㍍すぎに両足にけいれんが起き失速。「完全に疲れてしまった。悔しい」と、レース後は悔しさをあらわにしていた。

高校ラグビー北大会

帯工、本別初戦で散る

十勝勢に3年連続1回戦の壁

【1回戦・帯工―美幌】帯工は後半23分、NO8市野慎一郎（左）が敵をハンドオフでかわしながらサイドアタックで突き進む

【美幌】ラグビーの第57回道高等学校南北選手権大会兼第84回全国高等学校大会道予選会（道高体連、道ラグビーフットボール協会など主催）競技第1日は29日、網走管内美幌町柏ケ丘運動公園陸上競技場などで南、北大会の各1回戦を行った。本別（十勝第2代表）は序盤から中標津（釧根第1代表）のFWの圧力にセットプレーを崩されるなど思うようなラグビーをさせてもらえず、後半ようやくFWが互角の戦いを見せたものの合計10トライを奪われ0―68と完封負け。帯工（十勝第1代表）は美幌（北見第2代表）に対し、大事な場面でのミスから得点を許して追う展開となり、終盤2トライを返して巻き返しを図ったものの前半の失点が響いて14―26と惜しくも敗れた。これで十勝勢は3年連続初戦敗退を喫した。（大野篤志、金野和彦）

意地の2トライ 帯工

◇1回戦

美幌（北見）26（14―0、12―14）14 帯工（十勝）

	T	G	P	D	前	T	G	P	D	後	計	反
【美】	2	2	0	0	14	2	1	0	0	12	26	18
【帯】	0	0	0	0	0	2	2	0	0	14	14	13

帯工は前半8分、相手ラインアウトからのモールとライン展開でつながれ先制点を許した。15分にLO菅原の好タッチキックからラインアウト、モールでインゴールまで持ち込むもグランディングできずに相手にキックで逃げられ同点機を逃した。

逆にロスタイムにゴール前の混戦からトライを奪われ0―14で折り返した。

後半は先に点を取りたかったが、8分、13分とセットプレーから連続トライを奪われ0―26と点差が開いた。18分、敵ゴール手前5㍍でのスクラムからNO8市野のサイドアタック、ゴール正面でのペナルティーから菅原、LO宮本、FL和賀とつないで1トライを返した。28分には敵陣25㍍でのモールからSH仁志、PR勝見、市野と渡って左中間にトライ。14―26と追い上げたが、時間が足りなかった。引き締まった好ゲームだっただけに、ミスキックや相手FWの圧力に受けに回った前半の失点が悔やまれる。

【帯工】		【美幌】
	FW	
1 井上		菅原
2 大山		加勢
3 勝見		星
4 菅原		目黒
5 宮本		高橋
6 和賀		澤谷
7 堀部		鴨田
8 市野		岡井
	HB	
9 仁志		川本
10 越谷		幸田
	TB	
11 嶋木		岡本
12 照井		小泉
13 武野		酒井
14 高橋		川口
	FB	
15 半谷		平田

▽交代【帯】高井（後半5分・半谷）

【本別】		【中標津】
	FW	
1 阿部		小湊
2 境藤		河田
3 星崎		高嶋
4 大和田		鈴木
5 佐藤圭		矢本
6 木南		渡邊
7 芳川		関口
8 数藤		桑田
	HB	
9 四方孝		麻郷地
10 佐藤仁		玉置
	TB	
11 四方省		平井
12 小林		大崎
13 水谷		佐藤守
14 松浦		土生
	FB	
15 前佛		今橋

▽交代【本】眞浦（後半8分・星崎）

【中】狩野（後半15分・今橋）大場良太（後半20分・河田）桜井（同・鈴木）大久保（同・土生）

満足いく内容 後悔はない

○…帯工のFL和賀哲成主将（3年）、NO8市野慎一郎（同）の2人がチームの全得点を挙げた。1トライ目はゴール前でのドライビングモールで最後はLO宮本芳（2年）の持つボールを和賀が強引に奪うようにしてトライし、市野がコンバージョンキックを成功させた。沈み掛けていたチームがもう一度奮い立ち、2トライ目は市野が相手を振り切り1人抜け出してトライ。風の流れに逆らう左中間からの難しいコンバージョンキックを和賀が決めた。

和賀は「ミスはあったが今までやってきたことを出し切ってのミス。満足いく内容で後悔はない」。市野は「細かなミスで流れをつかめなかった」と唇を振るわせた。チームの核となっていた2人に増谷和夫監督は「和賀は本当にいいキャプテンだった。市野もよく引っ張ってくれた」とねぎらった。

のぼり 24-2323 すぎうら

"ラスト"飾れず 帯工 増谷監督

ハーフタイムで選手たちに指示する増谷和夫監督。選手へのげきが後半の2トライを生んだ

「小さいことを一生懸命やらないとだめ。15人が自分のポジションを守り15人で攻めないと。引き締まったナイスゲーム。負けは仕方ない」。増谷和夫監督はむせび泣く選手たちに語りかけた。

10月4日に60歳の誕生日を迎える増谷監督にとって今大会は現役教員として最後の"花園"（全国高校大会）への挑戦だった。選手たちは「みんな増谷先生と一緒に花園へ」（和賀哲成主将）と気迫のプレーを見せた。監督も選手たちの気持ちを承知している。「本当は勝ちたかったんだが…。よくここまで育ってくれた。一生懸命やることを学んでくれれば、これからの人生楽しくなると思う」

1975年、滝上高監督として全国出場を果たし、その2年後に帯工に赴任。81年には同校を全国に導いた。滝上での11年間、帯工での27年間と一貫して選手と向き合ってきた。「生徒が40歳、50歳になっても自分のところに来てくれる。ラグビーを教えてきてよかった」とうれしそうに語る。OBからは帯工の田村朋弘部長、旭川工の平間慎理部長と次代を担う指導者も輩出している。

少子化で部員の確保が難しく、少ない人数の中で常に全道レベル、十勝で常勝し続ける帯工のレベルを維持するのは大変な力が必要だ。全国は逃したが全道新人戦大会が控えている。「1、2年生にいい選手がたくさんいる。次、頑張ります」。来年度の身の振り方を決めるのはもう少し先になりそうだ。

相手圧力に屈する 本別

◇1回戦

中標津（釧根）68（33―0、35―0）0 本別（十勝）

	T	G	P	D	前	T	G	P	D	後	計	反
【中】	5	4	0	0	33	5	5	0	0	35	68	10
【本】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9

本別は中標津のFWの強烈な圧力やBKの縦への突破力などに崩された。開始2分、自陣ゴール前10㍍の相手ラインアウトからのドライビングモールを止められず先制を許すと、9分と14分にはマイボールスクラムからボールを奪われてトライにつなげられた。20分にNO8数藤を先頭にモールで押し込み相手ゴールライン手前まで押し込んだがラインを割れなかった。後半はゴール前での連続攻撃を止めるなど相手の圧力に対抗したが、BK陣の突破を許し、自陣でのプレーを強いられた。終盤、FB前佛主将がハーフライン付近から右サイドを個人技で駆け上がり敵陣深くえぐったがトライまでつながらなかった。

技術で負けたが 気持ちは勝った

○…「技術面では負けていたが気持ちは勝っていたと思う」とFB前佛和昭主将（3年）。最後尾から常にげきを飛ばし、最後まで強いキャプテンシーを見せた。

FWからのボールをBKの変則ラインで相手をかく乱し、トライを奪うという戦略を立てていたがスクラムのボールを何度も奪われるなど、相手の圧力にセットプレーが崩され、FWからなかなかボールが出ない。それでも後半は「FWの圧力には互角に渡り合えた。自分たちのやりたいことはできた」（FL木南智章・3年）。FWが耐えてボールが回り、CTB水谷徳次郎（2年）、WTB松浦大（3年）、前佛らが自慢の足を見せる場面も。けがで8月の支部予選時には松葉づえをついていたSO佐藤仁彦（3年）もブランクを感じさせない果敢なアタックを見せた。

内村綾太監督は「最後まであきらめず、足を動かし声も出ていた」と、粘りを信条とする選手たちの健闘をたたえた。

2年生全員出場 新チームに期待

○…本別は交代も含めて2年生全10人が出場。CTB水谷徳次郎は「1対1で負けていた」と唇をかんだ。

NO8数藤敬太は「途中で気持ちを切らさないよう、最後まで戦い抜く姿勢を」と3年生が貫いたボールへの執念と気迫を新チームにも受け継ぐ決意を示した。

◇1回戦

富良野（旭川）22（15―7、7―0）7 遠軽（北見）

旭川工（旭川）22（10―0、12―6）6 根室（釧根）

【1回戦・本別―中標津】本別は後半29分、FB前佛和昭主将（左）がハーフライン付近から右サイドを一気に駆け上がりゴール手前まで大きくゲイン

かちまいスポーツ
スポーツの日程・記録は▼FAX0155-25-2700
掲載写真の申し込みは▼TEL0120-25-9410